資料渉猟余話

その96

清水福市の業績と『伊那青年』

岡田正彦

明治三〇年代の初頭、飯田下伊那地方はもちろん全国各地に日清戦争の余波が残り、当時の青年達は国家の安寧と自分たちの未来の構築に真剣に立ち向かっていた。この時代、当地方の青年層の思想形成に多大な影響を与えたのが『伊那青年』である。

『伊那青年』は明治三十三年二月から明治三十六年までの間に三十八冊刊行された。その雑誌の執筆者は、人生の後半において郷土南信州で特に貢献した人々であったことに驚きを禁じ得ない。

現在『伊那青年』は入手し難く、それを研究する人のために、公益社団法人南信州地域資料センターは復刻を始めた。その活用の一助として同センターでは『伊那青年とその時代』を平成二十九年十月に出版した。迂生もその中で、「寄稿者・清水福市小伝」の題名で執筆した。

清水福市は上久堅村出身の長野師範学校の学生であったが、年月を経ているためその後の経歴の方々からの伝聞を参考にして、略歴を纏めた。

今回、この本が発刊されると、宮田村の粟谷真寿美さんから新資料の提供があり、疑問になっていた点が明らかになったので紹介したい。

それは、清水が長野師範学校を卒業して同校付属小学校の訓導から、飯田尋常高等小学校に転勤してからのことである。

大正四年四月二十七日、市村咸人は出勤途中、清水福市と郡視学の二人に出会い、神坂を越えて広島より九州へ学事視察に行くことを聞き驚いた。さらにその四日目の五月一日、

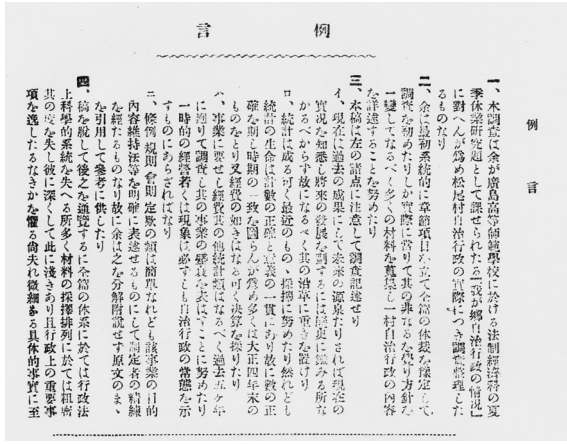
序言

曩日廣島高等師範學校教育科に在學の清水福市君夏季休業中の研究として我が松尾村自治行政の實況を調査せんことを請はる十數日にして稿成り執きて之を閲るに我が村現在に於ける自治活動の情況は先づ其の要領を網羅して餘す所なく彙類整然として村治の一覧に便なり我が村既に村會の同意を得て今や村史の編纂中にして此の種の資料を要すること急なり故に今茲に同君の調査せられたるものを請ふて印刷に附し村内の諸司に頒ち以て我が松尾村自治行政の一斑を見るに便せんとす

希くは我が村民有司が之れに依り村治の實相を通觀して其の長短を研究認識し治績の擧れるものは益々之を助長改善を圖り足らざるものは之が企畫發展に努力し擧村一致以て我が村治の堅實圓滿なる發達に貢献せられんことを熱望して已まざるなり乃ち一言を述べて序とす

大正五年八月二十七日　　松尾村長　森本勝太郎

『松尾村自治一班』の序文



例言

一、本調査は余が廣島高等師範學校に於ける法制經濟研究の夏季休業研究題として課せられたる「我が郷里治行政の實況」に對へんが爲め松尾村自治行政の實際につき調査を整理したるものなり

二、余に最初系統的に章節項目を立て全篇の体裁を豫定して調査を初めたりしが實際に當りて其の典拠を尋ね方針を一變してなるべく多くの材料を蒐集し一村自治行政の内容を詳述することを努めたり

三、本稿は左の諸点に注意して調査記述せり

イ、現在に過去の成果にして未來の源泉たりまたは現在の實況を知悉し將來の發展を到するには歴史に訪ふべき所なかるべからず故に可と最近のもの、拘泥に努めたり然れども

ロ、統計は成る可く最近のもの、拘泥に努めたり然れども統計の生命は計數の正確と意義の一貫にあり故に數の正確な期し時期の一致を圖らんが爲め多くは大正四年末のものをとり又經費の如きはなる可く決算を採りたり

ハ、事業に要せし經費及其の他統計類はなるべく過去五ケ年に遡りて調査し其の來歴の變遷を表はすことに努めたり一時的の經營者くに現象に必すしも自治行政の常態を示すものにあらざればなり

ニ、條例規則會則定款の類は簡単なれども該事業の目的内容維持法等を明確に表述せるものにして調査者の精練を經たるものなり故に余は之を分解附説せず原文のまゝを引用して參考に供したり

四、稿を脱して後之を通覧するに全篇の体系に於ては行政法上科學的系統を失へる所多く材料の採擇排列に於ては祖密其の度を失し彼に深くして此に浅きあり且行政上の重要事項を逸したるなきかを懼る尚失れ微細なる具体的事實に至

『松尾村自治一班』の例言

その序言に時の松尾村長森本勝太郎が次のように述べている。「曩日廣島高等師範学校教育科に在學の清水福市君夏季休業中の研究とて我が松尾村自治行政の実況を調査せんことを請はる（以下略）」と。また、本人の例言に「一、本調査は余が廣島高等師範学校に於ける法制経済科の夏季休業研究題として課せられたる（以下略）」とあり、東京高師ではなく、広島高師に在学したことが明確となったのである。

さらに、その著書内容は、過去五年間飯田小学校（現追手町小学校）に奉職していた体験を生かし、如何に自然分野と人文分野を融合した教育をすべきかを説いている。これらが記された『長野県下伊那郡松尾村自治一班』は、その後の松尾村誌の先駆けとなった著作と思われる。

新資料によって清水福市の経歴が訂正され、また、教育者として歴史学者としての生き様を知ることができたのである。

（飯田市上郷飯沼）

市村は清水から高師入学の電報を受理する。市村の日記には高師とのみ記載されていて、その後の活動拠点が東京であったために、親戚筋でも高師は東京高師と考えられていた。しかし、実際は廣島高師であった。それが今回の粟谷さんの新資料で明らかになったのである。

その資料とは大正五年八月刊行の『長野県下伊那郡松尾村自治一班』である。